

カワラ版

週刊 WORKS

(一社)県測量設計コンサルタント協会

協同エンジニアリング(株)Aチームが優勝

第30回親善ボーリング大会を開催

今年で30回目を迎える(一社)大分県測量設計コンサルタント協会の「6月3日 測量の日」制定記念の親善ボウリング大会がこのほど、大分市のOBS明野ボウルで開催され、団体の部は協同エンジニアリング(株)Aチームが、個人の部はあべたつきさんが優勝を果たした。

大会には、72チーム(35社・288名)が参加。甲斐筆美同協会長の挨拶に続き、昨年個人優勝を果たした日高哲氏が選手宣誓。協会労務厚生委員会や昨年の団体優勝チームを代表して森一生さん(西日本コンサルタント(株)Aチーム)らの始球式で第1シフト36チー

ム、第2シフト36チームに分かれスタート。

団体の部は1チーム4名の2ゲーム合計スコア(女性はHD20)で、個人の部は2ゲームの合計スコアで、HD賞は男子、女子それぞれ1ゲームの最高点で競われ、試合ではチームメイトがストライクやスペアを取るたびに、拍手と歓声が湧き上がっていた。

試合結果は次のとおり。※敬称略

【団体の部】

【優勝】

■協同エンジニアリング(株)A(ひだかさとし、ふじやまけいた、さとうひろき、どばしみらい)=1,295点

■株佐藤設計コンサルタントA(おのひろあき、とくらまもる、おのなおこ、まつだよしみ)=1,228点
〔3位〕

■東洋技術(株)B(えとうしんたろう、あだちたくま、ごとうまさや、ほあきふみひろ)=1,223点

【個人の部】

【優勝】

■あべたつき(株建設コンサルタントサニーB)=406点



〈大会の様子〉

■ひだかさとし(協同エンジニアリング(株)A)=398点
〔3位〕

■とくらまもる(株佐藤設計コンサルタントA)=372点

■あべたつき(株建設コンサルタントサニーB)=231点

■どばしみらい(協同エンジニアリング(株)A)=179点



〈優勝チーム〉

清松総合鐵工(株)

外国人技能実習生へ感謝状贈呈

令和元年度安全大会を盛大に開催

社員を大切にし、地域社会に貢献する国土交通省Hグレード認定工場の清松総合鐵工(株)(清松芳夫代表取締役、本社:宇佐市大字尾永井470番地の1)の令和元年度安全大会がこのほど、同社1階朝礼広場で盛大に開催された。

大会には、来客をはじめ従業員、協力会社など関係者約90人が参加。会場には、大

人気イラストレーター那須奈美さんの特設ブースを開設。安全大会の総合司会は、人気レポーター日高由貴さんが務め、清松社長が「安全大会に向けて、一ヶ月前から準備をしてきました」と挨拶し、来客(有名人)がそれぞれ紹介された。

安全講話を講師の松本久美子こと葉クローバー代表(元NHKアナウンサー)が、テー

マ『言葉は心の食材』と題して「①福ことば②毒ことば③置きことば」について講演。俳優の中村卓二さんによるコミュニケーションワークショップでは「身体の運動」を、参加者全員で行い大会を盛り上げた。

安全大会での社長講話では、清松社長が『ハチドリのひとしづく』について、スライドを交えて講話した。ステージでは、『いいね大賞』の表彰式。外国人技能実習生のエル君とディーン君の2名へ感謝状贈呈。地域貢献事業として、尾永井地区への寄付贈呈があった。

社屋屋上の特設会場へ移動し、書道家の三重野文緒さんによる書道パフォーマンスがあり、最後にBBQパーティーで楽しんだ。清松社長は「社員と地域を大切にし、社員には仕事も含めて大いに楽しんでもらいたい」と話す。



〈挨拶する清松社長〉

清松総合鐵工 株式会社

未来がある

ここには
ゆめ

国土交通大臣認定 H グレード

信頼のファブ
清松総合鐵工株式会社
Kiyomatsu Steel Structure co.,ltd.

AW検定認定工場

TEL.0978-32-2176 (代) FAX.0978-32-0573
(E-mail) info@kiss.ne.jp (ホームページ) http://www.kiss.ne.jp

**35億売って
ハワイに行こう!**

我社は建物の基盤となる鉄骨を造っている会社で人々の生命と財産を守ることが我社の使命だと考えています。昨年会社創立50周年を迎え、新社屋及び第5工場も完成し、九州内でもトップクラスの実績を上げています。そのような中でも、楽しく仕事をすることこそが重要だと思っており、社員旅行は海外に行って参りました。更に「35億売ってハワイに行こう!」を合言葉にして頑張っています。

35億売って
ハワイに行こう!

大分トリニティ
クラブスポンサー
ウェルスバ大海
プラザスポンサー

みんな伝心

ダムや長大橋、トンネルなど、いつか造らなくていい時代が来る。発展途上国では高等技術の活用などが出来ようが、日本においてはいつか必要とされない時代が来るだろう◆発展途上

国だって、日本で技術を覚えれば帰国してその技術も活用されるであろう。その昔、県外大手の建設会社の下請けによって技術力が伸び、地方の建設ゼネコンでも施工できるようになったように◆では、今後その

高等技術はどのように蓄積されどのような場で活用されるのか。今後の課題もある。そのためにも国家プロジェクトを立ち上げなければならない。次世代の若者に残せるような何かを創造していくかなければならない◆そ

れは、環境問題であったり、自然と共にできる何かであったり、芸術的なオブジェであったりするのかもしれない◆土木・建築・未来の夢を追いたい。バブルのような熱が欲しいと思う。令和の時代に。